

朝日カルチャーセンター 新宿 [シリーズ・女帝 則天武后] 2017年 8/28 13:30-15:00

講師 加藤徹 <http://www.geocities.jp/cato1963/3daiakujo.html>

中国史上、唯一の女帝となった「則天武后」は、近年は「武則天」と呼ばれることも多い。彼女が生きた唐の時代は、いわゆる「中国四千年の歴史」の折り返し点にあたる時代だった。男尊女卑の時代に、彼女はどのようにやって帝位につくことができたのか。そしてなぜ、武則天以降は一人も「女帝」が現れなかったのか。日本を含む他国の女帝と「武則天」を比較することで、中国の歴史と文明の特徴を考察します。(講師記)

則天武后、武則天

生前から死後にかけて、さまざまな呼び方がある。天后 聖神皇帝 則天大聖皇帝 則天大聖皇后 大聖天后 天后聖帝 則天皇后 則天順聖皇后 ……

ポイント

○「売り家と唐様(からよう)で書く三代目」…中国の王朝も日本の幕府も、東洋の世襲政権の永続性は3代目で決まることが多い。唐の第三代皇帝は高宗(李治)と「嫁」の武后。日本の幕府の三代将軍は源実朝、足利義満、徳川家光。

○「年上の女房は金(かね)のわらじを履いてでも探せ」…武后は西暦 624年 2月 17日生まれ、夫の高宗(李治)は 628年 7月 21日生まれ。

○高宗と「百忍治家」…高宗が「九世代同居」の秘訣を問うと、張公芸は黙って紙に「忍」の字を百あまり書き、それを見た高宗は涙を流した、という挿話。

『旧唐書』卷一百九十五：鄆州壽張人張公藝，九代同居。北齊時，東安王高永樂詣宅慰撫旌表焉。隋開皇中，大使、邵陽公梁子恭亦親慰撫，重表其門。貞觀中，特敕吏加旌表。麟德中，高宗有事泰山，路過鄆州，親幸其宅，問其義由。其人請紙筆，但書百餘「忍」字。高宗為之流涕，賜以縑帛。

○武后と「無字碑」(乾陵無字碑)…高宗と武后の合奏墓の石碑には字が刻まれておらず、白紙のような状態のままである。その理由は謎である。

○「隋唐」時代の特徴…「大分裂時代」後の統一。貴族社会から官僚社会(武士商社会)への過渡期。「科挙」の成立。李白や杜甫が登場する下地。

○唐の皇室・李家…異民族。乱脈。高宗は父の側室を、玄宗は息子の妃をわがものとする。

○唐…漢と並び、中国の代名詞的な王朝。「漢人」と「唐人」の語感のニュアンスの差。異国情緒。

○武后と日本…武后の夫は「天皇」、武后は「天后」と自称した。

「日本」号を最初に承認したのは武后だった。日本の貴族・粟田真人は大宝 2年(702年)「遣唐使」として中国に出発した。当時は「武周」だった。日本にとっては 663年の白村江の戦い以来初の本格的な使節派遣であった。武后は「日本」という新しい国号を承認し、が成立したことを唐に対して宣言するなど、様々な目的を持った使節であった。長安で皇帝に在位中だった晩年の武則天は粟田真人を「司膳員外郎」に任じた。唐人は粟田真人を「好く経史を読み、属文を解し、容止温雅なり」と評した。

聖武天皇(在位 724年- 749年)と光明皇后、その娘の孝謙天皇は、武后の治世をかなり

建国の時点では、依然として中国の各地に隋末に挙兵した群雄が多く残っていたが、それを高祖の次子李世民が討ち滅ぼしていった。勲功を立てた李世民は、626年にクーデターを起こすと高祖の長男で皇太子の李建成を殺害し実権を握った（玄武門の変）。高祖はその後退位して、李世民が第2代の皇帝（太宗）となる。

太宗は北方の強国突厥を降してモンゴル高原を羈縻支配下に置き、北族から天可汗（テングリ・カガン）、すなわち天帝の号を贈られた。また内治においては三省六部、宰相の制度が確立され、その政治は貞観の治として名高い。その治世について書かれたものが『貞観政要』であり、日本や朝鮮にまで帝王学の教科書として多く読まれた。

唐の基礎を据えた太宗の治世の後、第3代高宗の時代に隋以来の懸案であった高句麗征伐（唐の高句麗出兵）が成功し、国勢は最初の絶頂期を迎える。しかし、高宗個人は政治への意欲が薄く、やがて武后（武則天）とその一族の武氏による専横が始まった。夫に代わって専権を握った武則天は高宗の死後、実子を傀儡天子として相次いで改廃した後、690年の篡奪により（載初元年）国号を周と改めた（武周）。

中国史上最初で最後の女帝であった武則天は、酷吏を使って恐怖政治を行う一方、新興富裕階層を取り込むため土地の併呑に許可を与え版籍の調査を緩めたが、農民の逃散や隠田の増加が進行して社会不安と税収減及び均田制の綻びを招いた。武則天が老境に入って床にあることが多くなると権威は衰え、705年（神龍元年）、宰相張柬之に退位を迫られた。こうして武則天が退位させた息子の中宗が再び帝位に就き、周は1代15年で滅亡した。

則天武后 そくてんぶこう（624ころ—705）

日本大百科全書(ニッポニカ)の解説

中国、唐朝第3代高宗の皇后で、のち自ら周朝を建てる（在位 690～705）。生年は一説に630年ころともいう。本名照、山西省の大材木商で唐朝の創業に貢献し栄進した武士（ぶしかく）の娘。美貌（びぼう）で14歳のとき太宗の後宮に入り、帝の死後尼となっていたところを高宗（李治（りち））にみいだされ、寵（ちょう）を得たと伝えられる。姦計（かんけい）を用いて皇后王氏らを陥れ、655年自ら皇后に成り上がる。この立后には元勲長孫無忌（ちょうそんむき）一派とそれに対抗する官僚グループの対立が絡んでいたが、彼女は文芸と吏務に長じた新興官僚を巧みに登用操縦して旧貴族層を排斥した。数年のうちに高宗が健康を害すると、自ら政務を親裁し独裁権力を振るうに至った。683年高宗が病没すると、自分の子中宗・睿宗（えいそう）を次々と帝位につけ、彼女に反抗して挙兵した李敬業や唐の皇族らを武力で打倒し、同族を重用した。さらに御史や隱密（おんみつ）を使って大規模な弾圧を行い、政権強化に努めた。一方、女徳をたたえる仏経を偽作し、また符瑞（ふずい）を利用して武氏の天下を宣伝し、ついに690年国号を周と改め、自ら皇帝を称し、中国史上唯一の女帝となり約15年全国を支配した。

周の伝統に従って暦法、官名などを改正し、また十数個の新字（則天文字。囗＝国、「口」の中に「乙」＝日、○＝星、「一」の下に「生」＝人、「明」の下に「空」＝照など）を

使わせるなど人心一新を図った。治世には、北門学士らに命じ、『臣軌(しんき)』『百寮新誠(ひゃくりょうしんかい)』以下多数の修撰(しゅうせん)を行い、また臨時の使者を各地に派遣して人材の吸収に努め、さらに人気取りに官爵をばらまき、また明堂、天枢、大仏のような大建築をおこし、国威宣揚に努めた。狄仁傑(てきじんけつ)、魏元忠(ぎげんちゅう)ら名臣をよく用いたが、末期には張易之(えきし)兄弟ら寵臣が政治を乱し、ついに705年張柬之(かんし)らのクーデターにより、中宗の復位と唐の再興をみた。のちまもなく高齢で病死した。

彼女は悪辣(あくらつ)な策略や残酷な弾圧に加えて、陽道壯偉(巨根)の男を求め、妖僧(ようそう)薛懷義(せつかいぎ)や張易之兄弟との醜聞を残すなど、非難の的となる反面、自ら書をよくし、学芸を庇護(ひご)するとともに、有能な人材を抜擢(ぼってき)して新興階層を受け入れ、政治、社会、文化の各方面にわたり新機運をもたらした点は、高く評価される。死後、夫高宗と長安の北西乾(けん)県にある梁(りょう)山の乾陵に合葬された。ここにはみごとな石彫天馬や夷酋(いしゅう)列像(首を欠く)など当代文物をとどめ、周辺に壁画で名高い永泰公主墓など陪冢(ばいちょう)も多く、文物保管所ができています。彼女をテーマとする林語堂(りんごどう)の小説や郭沫若(かくまつじゃく)、田漢の戯曲など作品も多く、その希代の女傑ぶりはいまなお語りぐさとなっている。[池田 温]

『原百代著『武則天』全8巻(講談社文庫)▽外山軍治著『則天武后』(中公新書)』

趙翼(1727年 - 1812年)『二十二史劄記』卷十九新旧唐書より

武后が(皇帝になってから)美少年を寵愛することを、諫言役の朱敬則(635年 - 709年)がいさめたところ、武后は「さすがはそなた」と彩絹のボーナスを与えて度量を示した。男の皇帝は何千何百という妃をもつが、武后は「女主」として寵愛した異性は数名にすぎなかった。武后は人材登用に力を入れた。のちに、彼女の孫である玄宗皇帝の治世を支えた名臣たちの多くは、武后が抜擢した人物たちであった。(武后は批判されるべき点も多いが)女性の中の英主である、と言わざるを得ない。

至朱敬則疏諫選美少年，則曰「陛下内寵有薛懷義、張易之、昌宗矣，近又聞尚食柳模自言其子良賓潔白美須眉，長史侯祥雲陽道壯偉，堪充宸内供奉。」桓彥範以昌宗為宋璟所劾，后不肯出昌宗付獄，彥範亦奏云「陛下以簪履恩久，不忍加刑。」此皆直揭后之燕暱嬖幸，可羞可恥，敵以下所難堪，而后不惟不罪之，反賜敬則彩百段，曰「非卿不聞此言。」而於璟、彥範亦終保護倚任。

夫以懷義、易之等床第之間，何言不可中傷善類，而后迄不為所動搖，則其能別白人才，主持國是，有大過人者。其視懷義、易之等不過如面首之類。人主富有四海，妃嬪動至千百，后既身為女主，而所寵幸不過數人，固亦無足深怪。故后初不以為諱，並若不必諱也。至用人行政之大端，則獨握其綱，至老不可撓撼。陸贄謂「后收人心，擢才俊，當時稱知人之明，累朝賴多士之用。」李絳亦言「后命官猥多，而開元中名臣多出其選。」舊書本紀贄謂「后不惜官爵寵豪傑以自助，有一言合，輒不次用，不稱職，亦廢誅不少假，務取實才真賢。」然則區區帷薄不修，固其末節，而知人善任，權不下移，不可謂非女中英主也。